

研究課題

児童・生徒の連続的な学びをはぐくむ小中連携
のあり方

副題

～ICTを活用した2小1中の連携～

学校名	つくば市立桜南小学校
所在地	〒305-0043 茨城県つくば市大角豆789-1
学級数	18
児童・生徒数	549名
職員数／会員数	28名
学校長	稲生 耕一
研究代表者	櫻井 達雄
ホームページ アドレス	http://www.tsukuba.ed.jp/~ounan/



1. はじめに

平成17年10月、中央教育審議会答申の「義務教育に関する制度の見直し」の中には、「学校種間の連携・接続を改善するための仕組みについて種々の観点に配慮しつつ十分に検討する必要がある」と述べられている。小中学校の連携が必要な背景には、中学校に進学した後に発生する不適応の問題がある。教科担任制や部活動、他の小学校から入学した生徒の人間関係などが学校生活を不安にさせる原因となっている。これは「中1ギャップ」といわれ、小中の接続時期の大きな教育課題となっている。

義務教育9年間を一貫のものと捉え、継続的な指導が必要であるとして、近年様々な形で、小中学校の連携が行われてきている。つくば市でも小中一貫教育の方向性を示し、その中で、指導の連続性、持続性による個に応じたきめ細かな教育の推進や9年間を見通した弾力的・効果的な教育課程の編成といった具体的な方策を示している。

2. 研究の目的

本校でも、並木中学校区内にある1つの中学校と2つの小学校とが連携して小中一貫教育の研究を行うこととなった。同小中一貫教育の研究においては、「関わる力」、「学び続ける力」、「表す力」の3つの力を児童生徒に育成することを目的とした。本校ではこれまで、主に教科の学習や総合的な学習の時間において、知識の習得や問題解決学習に、ICTを活用してきた。そこで、小中学校間連携や小学校間の連携を深め、児童・生徒に3つの力を育成し、義務教育9年間を

見通した連続した学びと小中学校間の円滑な接続を図るための手立てとしてICTを活用しようと考えた。

3. 研究の方法

小学校間・小中学校間連携を図り、「中1ギャップ」を解消していくためには、直接交流をしたり、直接会って共同学習を行うこともあるが、場所・時間の制約を受け、限られたものとなる。そこでICTを活用して中学校と交流したり、同じ中学校に進学する小学校の間で、共同学習や交流活動を効果的に行えるようにする。そのために、「関わる力」、「表す力」、「学び続ける力」の3つの部会に分かれて、研修を進める。また、どのような授業や活動でICTを効果的に活用できるかを話し合い、実践・検証をしていくことにした。

4. 研究の内容と経過

(1)「関わる力」の育成について

本研究で述べている「関わる力」とは、自分の気持ちや思いを相手に伝えたり、わからないことを聞いたりしながら、相互依存できる力のことである。

相互依存、コミュニケーション、地域との結びつきといった課題をよりよく解決するためには、「関わる力」の育成が大切であると考えた。この「関わる力」を育成するために、小学校間・小中学校間の連携した経験を重視した学習活動、交流活動を意図的に実施した。

<ICTを活用した学習・交流活動>

小学校間連携の取り組みのひとつとして、5年生の社会科

と総合的な学習の時間の環境に関連した内容で「米づくり体験」を合同で行った。その後、電子情報ボードを使っでの交流を継続的に行っていった。交流を通して、疑問に思ったことやわかったことをお互いに情報交換していくことで、新たな疑問点を抱き、課題解決に取り組むというサイクルが成り立ち、米づくりに対する理解を深め合っていた。



電子情報ボードに乗せた児童の記述

「ようこそ先輩」では、中学校1年生が本校6年生の教室に来て、中学校についての説明をしてくれた。小学6年生の児童が、あらかじめ中学校についての話を先輩から聞いて知ることによって、



「ようこそ先輩」での中学生の体験談

生活や学習面での楽しさ、喜びを伝え、少しでも不安をなくし、入学への期待感が高まるように、中学生が伝えてくれた。中学生が用意してくれたプレゼン資料は、時間割などの表だけでなく、学習や部活動をしている中学生の様子を映像で見せながらの発表だったので、6年生もわかりやすく興味をもって話を聞くことができた。また、同様な不安を抱いて中学校に進学した先輩の体験談を聞いて、6年生自身が共感することができた。そのため、楽しく中学校生活を送っている先輩を見て、不安もやわらぎ、中学校へ進学することに対する期待感を高めることができた。

(2)「表す力」の育成について

本研究で述べている「表す力」とは、自分にあった方法で、自分の考えや気持ち、学んだことを表現（自己表現）し、それを伝え合う力のことである。児童生徒の実態から伝え合う力が必要であると考え、そのような力は、自分の考えを発信したり、相手の立場で傾聴したりする活動を通して培われる。したがって、小学校間・小中学校間連携の中で、共感し受容するような場面を意図的に取り入れた学習活動を展開した。

<ICTを活用した学習・交流活動>

小中学校連携の取り組みとして、本校5年生が中学生の「農業体験発表会」を聞きに行った。中学生は、農業体験を通してわかったこと、疑問に思って調べたことなどを、映像を使ってわかりやすく発表した。農業体験でわかったことや調べたこと、まとめたことを映像を効果的に活用して発表した。また、クイ



「農業体験発表会」

ズ形式を取り入れるなど、工夫した発表だったので、聞き手の小学生は興味関心を高めることができた。発表後には、質疑応答の時間を設け、疑問についていねいに答えてもらうことができた。この交流学习を通して、中学生のわかりやすいプレゼンテーションの仕方を学ぶことができた。

つくば市小中学校プレゼンテーションコンテストで、小中連携をテーマにした発表（「中学校に向けてホップ・ステップ・ジャンプ！」）を、本校6年生が行い、教育長賞を受賞した。中学生との交流活動を通して、さまざまな場面での中学生のすごさを改めて感じたこと、そんな中学生を目標に自分たちもがんばっていきたいという思いを発表することができた。



プレゼンコンテスト表彰式

(3)「学び続ける力」の育成について

本研究で述べている「学び続ける力」とは、学習意欲を高め、知識や技能を習得し、思考力、判断力、表現力等の伸長を図り、生涯にわたって主体的に学ぶ力である。この「学び続ける力」を育成するために、授業改善を中心に据え、義務教育9年間で発達段階に応じた学び方や、主体的な学び方、新しい課題を解決する方法を身につける授業を実施することとした。

<ICTを活用した学習・交流活動>

夏休みには中学校区の教員が本校に集まり、講師を招いて言語活動についての研修交流を行った。小中学校で9年間を見通した指導ができるように、教職員の資質向上を図る研修であった。その中でパワーポイントを用いてわかりやすい研修を行うことができた。



研修交流の様子

6年生では、中学校の教師が小学校に来て、数学や外国語活動の授業を行った。外国語活動では、中学校の先輩が英語を話している様子をテレビに映して聞くことができた。6年生がスピーチをした後、先輩の英語のスピーチを聞き、まねをしてみるなど、楽しみながら活動することができた。また、英語を上手に話す先輩に感心し、中学生のすごさを改めて感



中学校の教師による外国語活動



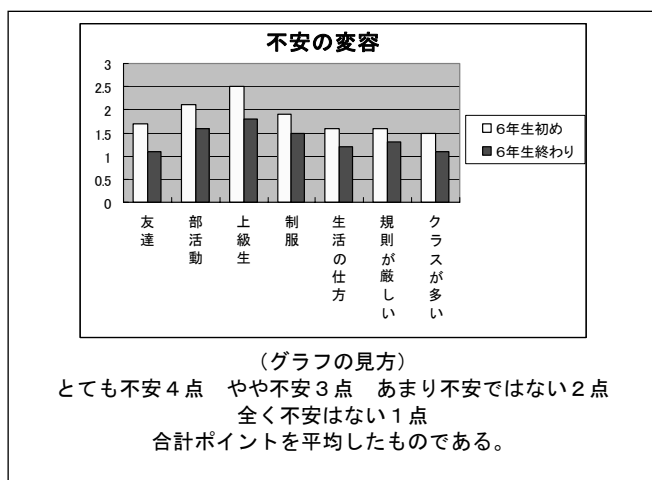
中学校の教師による数学の授業

じることができた。数学では、中学校の教師が自作コンテンツをもとに、課題を解決する上で大切な考え方をわかりやすく説明した。中学校の数学の課題が、小学校で学習したことをもとにして解決できることを知った児童は、小学校で学習したことをきちんと身につけていけば、中学校でも大丈夫だという安心感を持つことができ、中学校での学習を楽しみにするようになった。自作コンテンツがあることで、課題の解決方法がわからなかった児童も、言葉と映像から情報を得ることができ、とても理解しやすくなった。

5. 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

本研究では、「中1ギャップ」の解消を図る一助として、共同学習や交流活動などでICTを活用してきた。小学校6年生に「中学校生活への不安」を調査したところ、生活面での不安では、「部活動」、「上下関係」、「制服」について特に不安を感じていた。学習面での不安では、学習内容の難しさ、授業時間の増加、宿題の量に不安を感じている児童が多いことがわかった。



小学校6年生の変化を見ると、さまざまな共同学習や交流活動を通して、上級生に対する不安が軽減された。また、他

の項目についても、入学前に中学校を訪れる機会を増やしたり、中学生に小学校に来てもらったりするなど、小学校5年生～中学1年生における取り組みを充実させたことで、不安や抵抗感を減少させることができた。今年度は、「関わる力」、「表す力」、「学び続ける力」の3つの力を伸ばすために、共同学習や交流活動のほとんどでICTを活用した。そのことが、「中1ギャップ」の要因となる不安を減らす手立てとなったことが、子ども達の反応からわかった。

(2) 今後の課題

しかし、本研究を1年間行っていくことで新しい課題も見つけることができた。今回、「学び続ける力」を育てるために、2小1中で学習のルールを決めて取り組んだり、「表す力」をつけるために、電子情報ボードを活用して効果的にプレゼンテーションを行った。このように、共同学習をしたり、プレゼンテーションをしたりすることで、「関わる力」を身につけることを進めてきた。しかし、児童の友達や地域の人との日頃の関わり方を見ていると、関わる力が十分に身についたとは言えない。そこで、テレビ会議システムなどを活用し、時間の有効活用をすることで、関わる力の育成に力を入れていきたい。また、地域内での小中学生や保護者との関わりを深めるためにICTを活用して、保護者の思いや願いを伝えていく場を設定することで、子ども達の意識や態度を変えていきたい。

6. おわりに

本研究を通して、教育現場のさまざまな場面で活用できるICTの可能性の一端を感じることができたばかりである。今回、研究助成をいただいたことに感謝するとともに、今後もさらに幅広く、効果的にICTを活用できるように研修に励んでいきたい。

参考文献

- ・中央教育審議会答申の「義務教育に関する制度の見直し」